（参考）馬をめぐる情勢

1　馬をめぐる情勢

我が国における馬の飼養頭数は戦後減少し続けており、用途ごとの飼養頭数においては、農用馬及び競走用馬が減少傾向である一方、乗用馬については近年漸増している。現在の飼養頭数は、約7.4万頭（平成25年度）程度である。

2　これまでの改良の取組と成果

⑴　改良事業の概要

馬は、古くは農耕、運搬等のための生活に密着した役畜として、また軍用馬として改良が図られてきたが、戦後、農業機械化の進展により、役畜としての使途は薄れた。現在では、それぞれの利用目的に応じた改良が行われている。

農用馬は、種雄馬を中心にばんえい競馬の成績による選抜及びブルトン種、ペルシュロン種等のかけ合わせによる雑種強勢を利用して、けん引能力の向上を期待した大型で早熟、強健性を目指した改良が進められている。

競走用馬は、海外からの優良種馬の導入及び国内の好成績馬を用いた次世代生産が行われ、競馬の国際化も進展する中、競走能力の向上を目指した改良が行われてきた。

乗用馬は、乗馬人口の増加の中で、国内外の優良種雄馬を活用した内国産乗用馬の生産・改良が行われており、特に競技馬の飛越力、持久力の向上が図られている。

⑵　成果

農用馬はけん引能力及び産肉能力の向上を目指し、体長や体幅の増加による大型化が図られてきたところ。繁殖開始年齢は、かつて４才から５才であったものが２才から３才が主流となるなど、早熟化がみられている。

競走用馬は、「ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング(注)」において、平成26年にはランキング第１位及び第２位が日本調教馬となるなど、国際的にも競走能力面でトップクラスとなった。

乗用馬では、近年、内国産馬が国際馬術競技会で優勝し、内国産馬として初の快挙を遂げている。

注：ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング
ＩＦＨＡ（国際競馬統括機関連盟［本部：パリ］）は、世界的な主要なレースでの成績に基づき、競走用馬の評価を実施。その結果をランキング化して公表したもの。

Ⅵ　めん羊

1　改良・増殖をめぐる現状と課題

めん羊は、肉利用を目的として主にサフォーク種が飼養されており、産肉能力及び繁殖能力の向上が図られている。

近年では、サフォーク種以外の品種を利用した交雑による繁殖能力の向上も図られるなど、多様な品種の導入や飼養が行われている。

また、畜産物利用だけでなく、高い放牧適性をいかした耕作放棄地の有効活用や景観保全への活用、小型で扱いやすい特性をいかしたふれあいによる安らぎや癒やし効果の発揮や教育への活用、地域特産品づくり等の多様な利活用も行われている。このため、飼養及び衛生管理技術の向上を図るための情報提供等が重要となっている。

一方、血統登録頭数の減少に伴い、優良純粋種の維持・確保が課題となっており、優良な種畜の広域利用に向けた情報共有や利用目的に応じた種畜供給を推進する必要がある。

2　改良目標

⑴　能力に関する改良目標

国産ラム肉の需要に応えるため、斉一化に重点を置き、安定した生産体制づくりに努めるとともに、生産コストの低減を図るため、産肉能力及び繁殖能力の向上に努めるものとする。

また、草類に対する食性の幅が広く、下草等の短い草を好むなどの採食特性をいかしつつ、地域でのめん羊の多様な利用を図るものとする。

①　産肉能力

発育性、増体性及び枝肉歩留りの向上に努めるものとする。

②　繁殖能力

ほ育能力（１腹当たり離乳頭数）を維持しつつ、受胎率の向上に努めるものとする。

表１：能力に関する目標数値

	90日齢時体重		１腹当たり離乳頭数
	雄	雌	
現　在	30kg	26kg	1.4頭
目　標 （平成37年度）	33kg	29kg	1.5頭

注１：サフォーク種のものである。

注２：「90日齢時体重」は、母羊が「５才」「単子分娩・一子ほ育型」の場合の数値を基準とした補正係数を用いた次の算式により算出される。

$$90日齢時体重＝生時体重＋\frac{測定体重－生時体重}{測定日齢}\times 90$$

×（母羊の年齢の補正係数）×（分娩・ほ育型の補正係数）

この算式を用いて、自ら飼養している子羊の90日齢時体重を計算することにより、上記の表中の数値と比較することができる。

注３：１腹当たり離乳頭数は90日齢離乳時のものである。

表２：母羊の年齢、分娩・ほ育型を補正する係数

要　因	補正係数
母羊の年齢	
２才	1.08
３才	1.01
４才	1.00
５才	1.00
６才	1.03
７才	1.08
分娩・ほ育型	
単子・一子	1.00
単子・二子	1.10
双子・一子	1.08
双子・二子	1.19
三子・一子	1.09
三子・二子	1.24
三子・三子	1.37